

服飾史家・中野香織さんに聞く

そもそもブレザーって何よ？

ブレザーって、ジャケットのひとつではあるのですが、実は独特の出自をもっています。

ここでは、西洋の服飾文化に明るい中野さんとともに、ブレザーの歴史や再び脚光を浴びている理由など、気になる疑問に迫ります。

Photograph / Yohei Fujii(peacemonkey) Edit & Text / Ryuta Morishita Cooperation / Gettyimages



Profile

服飾史家として、執筆や講演など、さまざまな分野で活躍。ヨーロッパの貴族文化から最先例のトレンドまで幅広く精通する。



1・2・3 ケンブリッジ大学とオックスフォード大学のボートクラブの学生を写したもの(3が一番古く、1896年に撮影されたもの)。素材はスウェット地がメイン。いわば今でいうジャージーです。4・5は違ってかかって、下の写真は、英・米海軍を写したもの。こちらはウールが使用されています。スポーツ由来のものがカジュアルとしてのイメージを、ミリタリー由来のものがドレスとしてのイメージをけん引。どちらの親も現存するからこそ、今でも汎用性高く着用できるってわけです。



Tip 1 ブレザーはもともとユニホームである



二つの起源が現存すること、それが今日まで愛される所以。テラーの間では「スポーツコート」として分類されるブレザー(※本来はブレザーと発音・表記するのが正しいが、ここでは他のページとの統一のためブレザーと表記)の起源については、二説が唱えられてきました。

まずは、ケンブリッジ大学セントジョンスカレッジのボートクラブ「レディ・マーガレット・ボートクラブ」(1825年創設)のユニホームのジャケットの色に由来するという説。ブレイス(燃え上がる炎)のような深紅のフランネルのジャケットがブレザーと呼ばれました。以後、色を問わず、あらゆるスポーツに着用されるスポーツコートがブレザーと総称されていきますが、もともと、学生のスポーツ用ユニホームだったので、動きやすく、学生はやや反抗的な意味をこめて、あえて図書館やバブなどにも着用して行きました。古い言葉で言えば、バンカラというニヤンスでしょうか。ちなみに当初は裏地なし、ペントなし(ペントは乗馬服のイノベーション)、パッチポケット、金属ボタンという特徴がありました。

もう一つの説は、戦艦ブレイザー号の乗組員が着用していた軍服に由来するという説。1837年にはすでに白と青のストライプ柄のブレザー号のユニホームが、ブレザーと呼ばれています。

Tips 3 勝者の証しとして



1. 1939年、ケンブリッジ大学の学生がゴルフに興じるところ。紺ブレにグレスラというスタイルは今にも通じるスタイルです。2. 8年のマスターズを制したハトリックワード。マスターズでは1937年の第4回大会から、観覧者と見分けられるようにするため観覧者には「グリーンブレザー」の着用が義務付けられました。今ではこのブレザーは勝者にだけ贈られます。その瞬間、「グリーンジャケットセレモニー」はマスターズでも特別なシーンとして、大会をにぎわせます。



Tips 2 エリートたちのワードローブ



1・2ともにアメリカの学生「アイビーリーガー」を撮影したものの(1982年のメンズクラブ別冊「アイビー PART.4」より)。アイビーとは高のことを指します。知識階級が集まる東海岸の大学(高に覆われるほど古い歴史をもつ)のことを総して、アイビーリーグと呼ぶようになりました。この世代のアイビーリーガーは必ずといっていいほどブレザーもっています。使い勝手のよさ、普遍的なイメージが、カッコつけることを嫌ったエリートに受け、学生のマストアイテムに。

アイビーリーガーに愛され、不動のファッションアイテムに

学生のスポーツウエアか、軍服か。二者択一する必要はありません。実は起源をこのように二つもつということこそが、ブレザーの用途をかくも広め、このアイテムの寿命を永らえさせているのですから。

現在、ブレザーは合わせるボトム、シャツやタイ次第ではパーティーにも着ていけるし、ビジネスシーンでも失礼にならず、デニムと合わせてカジュアルな場面でもOKとまさに万能。色柄も多様で、大胆なストライプもあれば、バイビングも鮮やかな色もあり。それもこれも、上記の二つの起源をもつからこそなのです。

ブレザーはまた、勝者が着る服というイメージももつようになります。コングレッションナル・クラブのレガッタの勝者には深紅のブレザーが、ゴルフのマスターズ・トーナメントでの勝者には緑のブレザーが、それぞれ贈られます。エリートが好んでブレザーを着るのも、出身大学やクラブを示すことができるというだけでなく、こ

うした「勝者のジャケット」というイメージを表現できることも無関係ではないでしょう。

今シーズンは、ブレザーブームが再燃。きっかけのひとつは、2017年に発売された「Rowing Blazers」という本です。著者のジャック・カー

ルソン氏は、1987年生まれのアメリカー人。英オックスフォード大学で考古学を学んだ研究者であるとともに、自身がボートクラブに所属して数々のボートレースで勝利した経験をもちます。そんな彼がブレザーについて調べ上げ、本にまとめたばかりか、ブレザーを中心に扱う「メンズウエアブランド」Rowing Blazers*まで立ち上げました。また、デーヴィッド・マークス氏の著書「LAWMOTORS」によるアイビー再発見の機運が高まっていたことも背景として大きい。ミレニアルズがストリートで新解釈によるブレザーを着用するなどの現象も見られます。新しい時代の空気感をまとったブレザーが「定番」を超えて新しい関光を浴びています。

文中野香織

Tips 4 メンズクラブとブレザー

1・2は1980年9月号、3・4は1994年2月号のメンズクラブ。トラットを都とする小誌は、創刊以来ずっとブレザーと、その篇こなしをアップデートさせてきました。80年代はアイビーリーガーたちに留り、そして90年代は法カジを先導し、ブレザーというものを極めたきたつもりです。今では篇こなし方も随分と変わりましたが、根底にあるものは変わりません。どう篇こなしても品よく、そして知的に見える、ブレザーを生かすための装いを追求しています。

